

<p>たりしない アダムス理恵</p> <p>皆同じ体操服を着ていてもちゃんと見つかる</p> <p>我が子の背中 高橋 佳子</p> <p>コンビニヘコーヒー買いにゆくとときは社員証 なしの私となる 尾崎 桜子</p>	<p>八十にならんにモテたい心ありピンクのシャツを伊勢丹に買う 稲垣 国男</p> <p>問診票に家族の既往歴聞かれ夫はそこに含まれませぬ 十月号・吉見恵美子</p> <p>観衆へ選手宣誓の手話終えて吉田は吉田くん</p>	<p>にもどれり 山本 絲人</p> <p>QRコードのようだ 教育は遠くから見れば 点がつながら 齋賀 万智</p>
<p>九月号より。伊藤作、下旬は、男児の活発な一場面を描いて絶妙。アダムス作、母は常に作者の味方、応援者なのである。その都度、心に刺さるフレーズで、作者を励まし、支えているのである。高橋作、運動会の歌であろう。背中で我が子を見つけるのは、母親である作者が一番早い、のである。尾崎作、常に首からぶら下げている社員証も、近所への買い物時には外すことが出来る。組織の一員として拘束される立場から解放される、ひと時の時間である。稲垣作、作者も十代・二十代の頃には、伊勢丹でカラフルなシャツを購入し、着こなし</p>	<p>十月号より。吉見作、問診票の家族病歴欄には、「父親・母親、兄弟・姉妹、祖父母」とあり、「夫」は含まれていない。多くの時間を共有している家族であるが、唯一、血のつながりがないのは、夫なのである。山本作、開会式の選手宣誓の場面である。大役を終えた直後の生徒の表情の変化を、見事に捉えている。齋賀作、近視眼と俯瞰教師としての視点である。比喩も秀逸。</p>	<p>まの子の口から出る 三月・平山 志保</p> <p>・出す時は小さな手があり片付ける時はわれのみクリスマスツリー 六月・吉本万登賀</p> <p>作品評では、担当者の持ち味・好み、という制約の中において、出来るだけ幅広い選歌と、可能な限り作者の思い・立場に寄り添った鑑賞（作者の代弁）が肝要であると思っております。結果として、種々至らない点がありましたことを、この場をお借りいたしましたして、深くお詫び申し上げます。本欄を担当させていただき、改めて「歌を読むことにより、おのずから自らの歌も生まれる」、という思いを強くいたしました。本当に、ありがとうございます。</p>
<p>高島屋ではなく、やはり伊勢丹なのである。</p>	<p>惹かれました。 栗の木よ憶えているかわが家に父母が居て兄妹の居て 二月・小林恵美子</p> <p>・下着のみ届けて夫と会えぬまま大きなマスクに駅まで歩く 三月・小林 優子</p> <p>・清らかな寝息と思うまだ嘘も知らないま</p>	